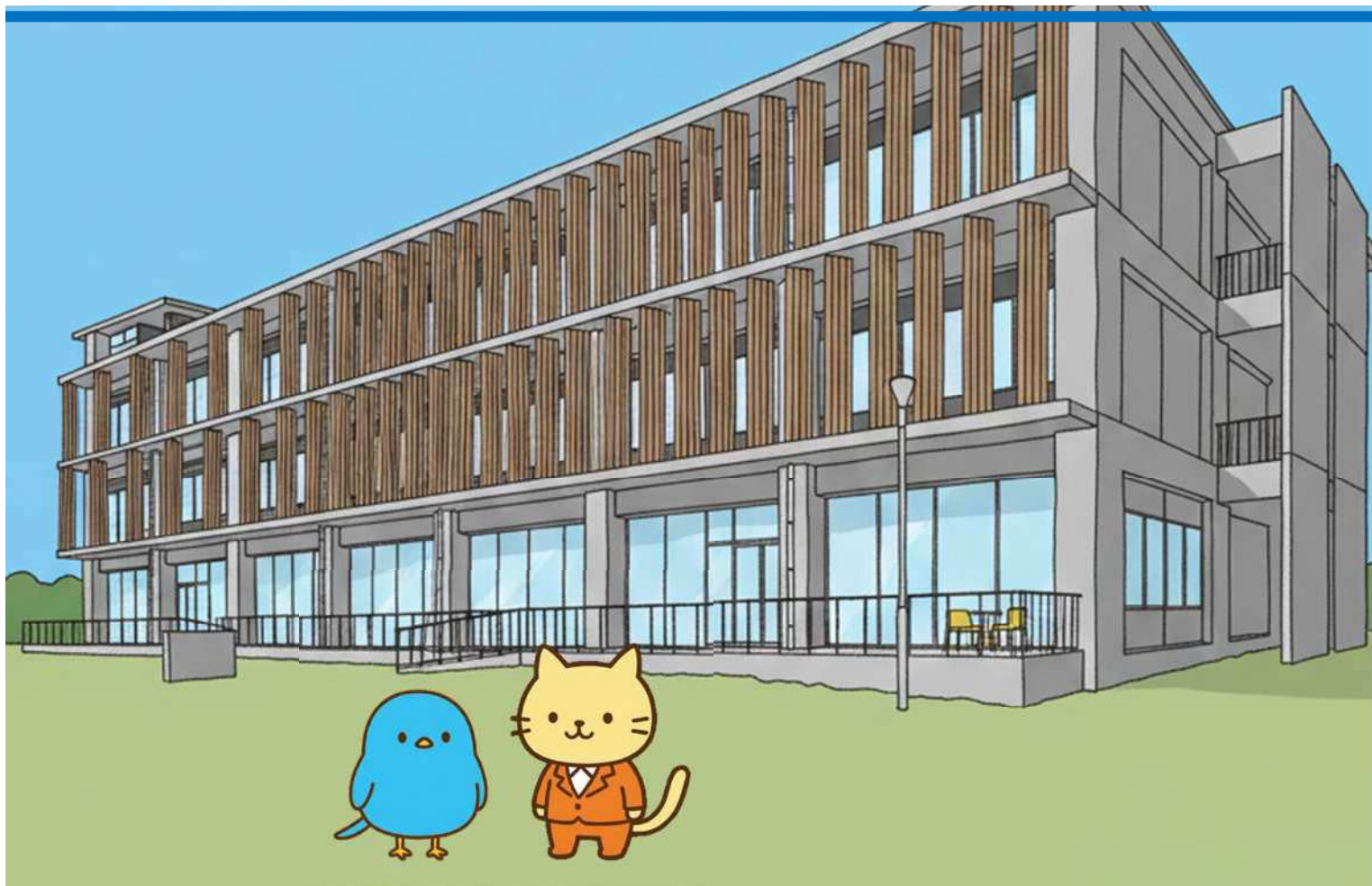


F D 通信

長崎県立大学 2026 年 3 月 第 4 号



特集：2025 年度 FD 研修会

第 1 回 FD 研修会 - P 2 -

実施日
2025 年 7 月 25 日（金）～
2026 年 3 月 8 日（日）

到達目標

●様々な自己研鑽に資する動画の中から自分が興味のある動画を視聴することで、自身の教授法について振り返ることができる。

●自身の教授法についての課題を把握し改善のための方法を考えることができる。

第 2 回 FD 研修会 - P 10 -

実施日
2025 年 9 月 8 日（月）
13:00～15:00

到達目標

●ケース・メソッドの学問的背景から、その教授法的意義を理解する。

●本講義での学びから自身の採用する教授法を省察する。

教養セミナー担当者研修 - P 12 -

< 事前研修会 >

実施日
2025 年 4 月 2 日（水）
17:00～18:30

< 振り返り研修会 >

実施日
2025 年 9 月 8 日（月）
15:15～16:45

ご挨拶

教育開発センター長 橋本 優花里

先日、道路の割れ目に咲くスミレの花を見つけました。たくましいなあと感心するとともに、その姿に勇気をもらいました。季節の移り変わりを目の当たりにし、この時期のFD通信の冒頭のご挨拶は、毎年、身の回りの植物のことに触れている気がします。

さて、今年度の教育開発センターのFDでは、昨年度に引き続き「授業内容・方法の改善と向上」をテーマに、名古屋商科大学の竹内伸一先生をお招きし、ケースメソッドについて学びました。このFDを受け、私自身の授業にも小さな変化を取り入れてみました。ケースメソッドと呼べるほど体系的なものではありませんが、教育心理学の授業において、学んだ知識を事例に当てはめて考える活動を取り入れました。これまでもアクティブラーニングを意識し、グループワークを中心に授業を展開してきましたが、事例を通して実践的に考える機会を設けることで、知識が実践知へと変わっていく手応えを感じました。

思い返せば、教員になりたての頃、今から20数年前の私は、授業をすることが苦手で仕方ありませんでした。心理学の基礎を教えるにしても、自分自身が十分に理解し、経験的に納得しているとは言えない内容を学生に伝えることに、大きな負担を感じていました。ベテランの先生方が「授業は楽しいじゃない」と仰っていても、「物好きだなー」と思ったりもしていました。しかし、授業を重ねる中で、学生がどこにつまずいているのか、そしてどのようにすればそのつまずきを解消できるのかを考え、授業法を学び、トライするうちに、授業方法の試行錯誤が楽しくなっていました。授業法について学び、それを実践する面白さは、今もなお増しているように感じます。気が付けば、「物好き」と思っていた側に、自分も立っているのかもしれません。

ここでもう一点、別の話題に触れたいと思います。学長から教育研究評議会等でご共有いただいたとおり、今後、認証評価の在り方が大きく変わろうとしています。本学は次年度に認証評価を受審しますが、その次のサイクルからは新たな評価制度が導入される見込みです。新制度では、学生の成長や教育満足度等について、大学全体ではなく学部単位で評価が行われることとなります。この見直しの背景には、入試偏差値ではなく教育内容そのもので大学を比較できる環境を整えるという意図があります。各学部において、学生の成長をどのように可視化していくのかが、今後ますます重要になるでしょう。私たちとしても、最新の動向に目を配りながら、FDを通じて着実に準備を進めていきたいと考えています。

末筆ではございますが、教職員の皆様には、今年度も教育開発センターの活動に多大なるご協力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。また、センター委員および事務局の皆様におかれましても、1年間にわたり多大なご尽力をいただき、誠にありがとうございました。

2025年度 第Ⅰ回 FD 研修会

(自己研鑽 FD)

教育開発センター委員 駿河 和仁

看護栄養学部 栄養健康学科

2025年度の全学FD研修会では、昨年度と同じ「授業内容・方法の改善と向上」をメインテーマとして2回に分けて開催されました。第Ⅰ回FD研修会は2023年度から継続されている「自己研鑽FD」の形式で、自身で興味のある大学教育・研究および運営等に関する動画の視聴、または他大学等の機関が開催する自己研鑽に関する研修会等へ参加することにより、自身の教授法についての振り返り、さらに課題を把握し、改善するための方法を考えていただくことを到達目標として実施しました。

大学教育等に関連する視聴動画については、昨年度は7つの機関が公開している約230の動画を教育開発センターからグーグルクラスルーム上で提供しましたが、本年度はさらに同機関が追加公開している動画(26動画)を追加しました。また、溝上慎一氏(桐蔭学園理事長、桐蔭横浜大学教授)の教育論動画チャンネルから現在進行中の「次期学習指導要領の改訂」に関する動画(【8】4動画)および東京大学 coursera オンライン講座内のアクティブラーニング技法やモチベーション理論、評価方法など大学教育における基礎的知識・スキルを身につけることを目的とした動画(【9】2講座)を新規に追加しました(図表1)。

図表1 本年度提供した動画の配信機関、動画所蔵数、視聴回数

動画配信機関	提供 動画数	追加 動画 数	視聴 割合 (%)
【1】東北大学高度教養教育・学生支援機構	16	0	42
【2】愛媛大学教育企画室	50	0	17
【3】愛媛大学教育企画室*IR 関連	10	0	3
【4】公立大学教職員研修システム(アカウント登録必要)	44	6	1
【5】教育機関 DX シンポジウムアーカイブス	41	20	28
【6】大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部	24	0	10
【7】東京大学フューチャーファカルティーカルディープログラム	69	0	3
【8】教職関係(次期学習指導要領改訂関連)	4	4	0
【9】東京大学 coursera オンライン講座(大学教育関連、有料)	2	2	0
計	260	32	

今年度の同 FD の実施期間については教職員の都合に合わせて実施いただけるように昨年度と同様の期間で実施し、夏季休業期間中から第 4 学期終了後も受講できるようにしたことで受講率の向上を計りました。その結果、今年度の本学教員（対象者計 147 名）の受講率は 95.9%（図表2）であり、昨年度（86%）に比べ受講率もさらに増加していました。また、月別の受講率をみると、第 1 回目の案内メール送信（7 月 25 日）から夏季休業期間（8, 9 月）で全体の約 26%であり、1 月以降のリマインドメール送信（1, 2, 3月初旬）後で約 67%でした。このことから受講期間の延長や受講に関するリマインドメール送信は受講率の増大にも効果をもたらしているものと考えられました。

今年度提供した動画の視聴時間（中央値）は、全体で 52 分であり（図表2）、昨年度（61 分）より短くなっていました。また、動画視聴時間は学科間で大きな差が認められており（図表2）、視聴時間の分布は、30 分未満が全体の約25%、30～60 分未満が約 32%、60～90 分未満が約 30%、90 分以上が約 13%であり、個人差が見られました（最短 8 分、最長 300 分、詳細結果は未掲載）。

図表 2 学科別の受講率および提供動画視聴時間

学科	受講率 (%)	受講者数	未受講数	動画視聴時間(分)	
				平均値	中央値
経営	100	15	0	46	50
国際経営	88.9	8	1	42.5	39.5
公共政策	100	19	0	66.6	48
実践経済	80	12	3	56.7	60
国際社会	100	20	0	61.5	55
情報システム	100	10	0	32.4	39
情報セキュリティ	92.3	12	1	69	76
看護	95.6	22	1	79.2	80.5
栄養健康	100	20	0	62.5	51.5
センター	100	3	0	48.7	40
全体	95.9	141	6	60.4	52

本年度提供した動画の視聴状況を比較すると、個々の動画では今年度新規に追加した「生成 AI を用いた文献調査ツールの動向」（教育機関 DX シンポジウムアーカイブス）が 1 位であり、全体の約 1 割（14 名）が視聴されました（図表3）。本動画を視聴された教員からは、学部・大学院学生の教育・指導や自身の研究における生成 AI の利活用の有効性や留意事項が理解できたなどのご感想を多くいただきました。一方、動画配信機関別では、学科別で比較すると、公共政策学科と情報システム学科では“生成 AI”関連の動画を中心とした「教育機関 DX シンポジウムアーカイブス」が提供している動画の視聴割合が多かったですが（それぞれ 50%、63%；図表4）、全体では「東北大学高度教養教育・学生支援機構」が提供している動画の視聴割合が最も多く、全対象者の 42%が同機関の提供している動画を視聴されており（図表1）、個々の動画視聴数においても 6 つの動画が 2 位から 5 位であり、昨年度同様上位を占めていました（図表3）。同機関の公開動画は多少古いものも含まれていますが、授業の設計・方法、大学生の心理、大学職員のキャリア等を中心としており、大学教職員の多くが参考にできるもので編成されています。また、同機関の動画視聴後のアンケート（参考になった点、授業等に取り入れたいこと）では、“研究倫理”、“コーチング”、“シラバス作成”、“クリティカルシンキング”、“汎用的能力”、“講義方法・改善”といったキーワードを含む回答が特に多く見られ、自身の教授法に対してフィードバックされたとする意見が多く寄せられていました。

図表 3 提供動画視聴ランキング（タイトルの色分けは図表1に示す動画配信機関のものと対応）

順位	視聴数	時間（分）	タイトル(受講 No.)	2024 年度 順位
1	14	20	生成 AI を用いた文献調査ツールの動向(5-1)	新規追加
2	11	84	学生理解と学生発達(1-3)	1
3	10	77	大学生のクリティカルシンキングの育成(1-5)	2
4	8	52	授業デザインとシラバス(1-1)	1
		86	発表理論を考える(1-14)	—
		39	Engaging Students in Learning in English-medium Classes(1-15)	2
5	7	51	コーチング技能を活用した院生指導(1-4)	2
		7	個人面談での話し方(2-12)	—

図表 4 学科別の提供動画視聴の割合（青い数字は各学科で最も視聴割合が多かった動画配信機関を示す）

動画配信機関	学科別視聴割合（％）									
	経営	国経	公政	実経	国社	情シ	情セ	看護	栄養	セ
【1】	46	13	28	42	56	38	42	45	55	33
【2】	33	13	28	25	17	0	17	9	5	33
【3】	0	0	6	8	0	0	0	9	0	0
【4】	0	0	0	8	0	0	8	0	0	0
【5】	20	25	50	25	22	63	25	18	15	67
【6】	0	38	6	8	6	0	0	18	15	33
【7】	0	13	0	0	0	0	8	0	10	0
【8】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【9】	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第Ⅰ回FDの到達目標（①：自身の教授法について振り返ることができる、②自身の教授法の課題を把握し、改善のための方法を考えることができる）に対しては、「ほぼ達成できた」がそれぞれ 49.7%、52.4%で概ね半数を占め、「どちらかといえば達成できた」がそれぞれ 43.4%、39.3%であり、いずれの到達目標に対しても 90%以上が目標を“達成”できていると自己評価されており、“（どちらかと言えば）達成できたと言えない”の自己評価はみられませんでした（図表 5）。

図表 5 到達目標に対する自己評価

【到達目標Ⅰ】様々な自己研鑽に資する動画の中から自分が興味ある動画を視聴することで、あるいは他大学等の研修会に参加することで、自身の教授法について振り返ることができる。

【到達目標 2】自身の教授法についての課題を把握し改善のための方法を考えることができる。



その他、本 FD に対する感想、意見等の自由回答(図表6)からは、自己研鑽 FD の方法は、自身の興味や都合に合わせていつでも自由に選択・視聴でき、多種多様な教育効果の高い動画を視聴することで自身の教授法の振り返りや改善にも効果があると感じている回答が多く、今後も学内 FD 研修のひとつとして継続してほしいとの感想・意見が昨年度と同様多くみられました。また、本 FD の受講条件にとして提供した動画の視聴以外に「他大学が開催する自己研鑽(または大学教育)に関する研修会等への参加も含む」とされており、今年度は3名の先生がご自身の研究・教育専門分野での研修会や会議に参加されていました。これらは“生成 AI の生かし方を探るー初年次教育からのアプローチ”、“標準教材を授業でどう使う?数理・データサイエンス・AI 教育の深化に向けた授業設計と実践紹介”および“法教育における生成 AI の活用アイデア”という内容であり、いずれも教育現場での生成 AI に関するものでありました。2030 年度から順次実施される予定の次期学習指導要領の改訂においても生成 AI の利活用は非常に重要なテーマのひとつとなっており、図表6のご意見にもあるように大学教員としても非常に関心度が高く、今後さらに対応していかなければならないものであると考えられます。またその他のご意見、要望として、本学には外国語を担当されるネイティブな教員も複数在籍されていますが、英語で実施もしくは字幕を行っている動画がもっと多くあればよかったといったご意見や、講義以外の学生指導(生活指導含む)や学生とのコミュニケーションの取り方等についてのスキルアップ提供動画や研修会を希望されるご意見などもいただきました。今後もこのような個々のご意見、要望なども考慮しつつ、本学教職員の教育・研究力の充実と本学学生の学習成果向上につながるよう、効果的な全学 FD 研修会を実施させていただければと思います。

図表 6 第 1 回 FD 研修会の感想、意見など(自由回答)

このたびも自己点検のための貴重な機会を頂きました。誠にありがとうございました。
幅広いスパンから大学と社会の歴史を振り返ることができ、興味深かった。
大変勉強になった。
次回も期待しています。
先進事例、最新事例に触れる。
なかなかすべてを視聴することはできないが、あらためて確認する機会になったと思います。
多数のテーマを用意して頂いて、ありがとうございます。
たいへんよかった。
目標に応じたオンデマンド方式での研修は必要な時期に応じて視聴出来る。有意義である と考える。
日頃学内の教員間で自己研鑽に関する情報共有をする時間は限られるため、このような形 式の FD で各自が必要とする項目について学ぶことができるのは非常によいと思います。
他にも興味のあるタイトルの動画があったので、時間の許す限り視聴したいと思います。 ありがとうございました。
初心を立ち返って研究、教育に取り組む機会になればいい。
非常に興味深い内容をアップしていただき、非常に良い勉強になりました。
幅広い分野の情報がありとても勉強になりました。
十分に意義があった。講義の改善に役立てるとともに、カリキュラムの在り方を検討する 際に参考になった。
岡田先生が示された説明の中に、「2. 学習成果研究からの知見」というのがあり、「Q. 学生は卒業して何を身につけたのか?」「Q. 大学生活では、本当に学生は成長しているの か?」「自己評価としての学習成果と他者評価としての学習成果 (GPA) との関連は?」「Q. 学習成果に影響を与える要因は何か?」といった根源的な問いに対して、エビデンスを交 えながら示されている所が興味深かった。その一方で、いくつか気になる点(詳細略)も あった。 本研修は、自身の講義や小集団教育ともひきつけながら、様々なことを考えるきっかけに なった。
もっと沢山参加したいですが、落ち着いた時間がなかなか取れないので、来年はもっと時 間を割こうと思います。
さまざまな教育に関するテーマを扱っているので、大変勉強になる。毎年この動画学習は 全学 FD に組み込まれているが、ぜひ次年度も取り入れてほしい。
さらにたくさんの、教授方法に関する情報を知りたい。
FD 研修会の準備等、いつもありがとうございます。教員でもこうした学びの機会がある ことは良いことです。

関心のあるテーマについて、少しずつ学習していきたい。
FD 研修会にて短期的な目標を主にすることが多かったが、中・長期的目標も立てていくことが大切だということを理解することができた。
次回科研費申請の参考となった。
自分の関心に応じて動画を選んで視聴できるこの形式の FD がとても勉強になっています。自分のペースで深く考えながら学ぶことができ、日々の授業実践にも直結する学びがありました。ありがとうございました。
・自分が受講したい研修を受けられるこの方法は、とてもいいと思います。 ・動画の収集は大変だったかと思います。お疲れさまでした。ありがとうございました。
今後も生成 AI の利用に関して勉強したい。
卒論指導で使える、生成 AI を用いた文献調査でした。良い動画をご提供たまり、ありがとうございました。
先端の話題を専門家のアドバイスを得ることで、個人的なバイアスを回避することができた。
少し古い動画でしたが、楽しく拝見しました。
授業や業務の改善につながる発見があった。
最新の動画で学ぶことができ、活用しやすかった。
いつもありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。
今年の夏は考えないといけないことが多く、動画視聴を後回しにしてしまったが、きちんと動画を見ることで、授業に対する姿勢も振り返ることができた。良いタイミングで視聴できた。
今後もこのような形態で FD 研修を行いたい。
いつでも自分が学びたい（知りたい）と思う動画での教材を選択する方法はとてもいいと思います。
生成 AI など現代的な課題もあり、有意義であった。
自己の興味ある動画を選択できるので、楽しく学べる。他の動画も時間がある時にコツコツ見て、学生に伝わる授業ができるよう、ブラッシュアップしていきたい。
毎年様々な興味ある動画を視聴することが出来、大変興味深いです。まとめてある程度の時間が確保出来ると良いのですが難しいため、スキマ時間にでも短時間で視聴出来る動画があるのが魅力であり、受講しやすいと思っています。
具体的な例がわかりやすく腑に落ちました。ありがとうございました。
このセッションは考えさせられる内容で有益でした。特に、メディア形式が学習と注意力に与える影響について考察を促す点でそう感じました。
学生一人一人、性格も異なり考え方も十人十色であるが、できる限り一人一人にきちんと、対応することが大事であることの確認ができた。

今後、学生に対して「答えを教える」姿勢ではなく、「問いを通して考えさせる」姿勢へと転換する必要性を強く感じました。授業や研究指導の中で、学生の内発的動機づけを高める働きかけが十分であったかを振り返る契機となり、今後の授業改善に向けた具体的な課題が明確になったと思います。

(以下、要望等があった回答の抜粋)

本学教員間で生成 AI の研究教育における活用法について、情報交換、ディスカッションできる機会があると助かります。
視聴期間が長く用意されているため、自身の繁忙に合わせて視聴することができた。将来的に、動画へのアクセスを通年で認めて頂けると、春休みや5月の連休などにも視聴できるので、より高い研修効果を期待することが出来ると思う。
毎回、動画を視聴して教育に役立つような内容を学習できている。 しかし、以前はどの動画を視聴したか毎年、忘れてしまうため、その履歴がわかるように工夫してほしい。
全体として、すぐに実践へ落とし込めるポイントが多く、非常に参考になりました。オンライン授業では学生の学習状況が見えにくくなりがちなので、「短い単位のコンテンツ＋毎回の小さなアウトプット（小テスト・コメント等）」をセットにする設計が効果的だと感じました。質問としては、受講者数が多い授業でコメント提出や小課題を毎回実施する場合、教員の負担を増やしすぎないための運用例（評価の簡略化、ループリック、TA活用等）があれば伺いたいです。
シーボルト校学生の特性（交通不便で通学が困難であったり、夜の授業では終バスに間に合わないため帰宅に苦勞するなど）リモート授業の導入とリモート授業のより効果的な実践方法について検討いただきたいです。
いつもありがとうございます。第1回FDは今年度2回目の受講になります。講義を前提にした教授法についての動画は充実しており、勉強になります。一方、留年生が増えていることから、講義以外の学生指導（生活指導含む）や学生とのコミュニケーションの取り方等について、教職員のスキルアップが求められているように思います。そこで、よろしければ、これらの動画の充実化も検討されてはいかがでしょうか。今後ともよろしくお願いいたします。
It would have been helpful if English subtitles were included in the videos for foreign teachers.
More English option videos would be nice.

2025年度第2回FD研修会

「教える」から「宿す」へ —ケース・メソッドが拓く新しい学びの形—

教育開発センター委員 金弘理志
国際社会学部 国際社会学科

2025年9月8日、本学では名古屋商科大学ビジネススクールの竹内伸一教授を講師にお招きし、「実践力養成のためのケース・メソッドの教授法的意義」をテーマとした第2回FD研修会を開催いたしました。竹内先生は、日本におけるケース・メソッド教育の第一人者であり、ハーバード・ビジネス・スクールで発展したこの教授法を日本の教育現場に即した形で体系化し、普及に尽力されている専門家です。研修会では、単なる事例紹介に留まらない「ケース・メソッド」の本質、すなわち学生が自ら葛藤場面に向き合い、他者との対話を通じて多角的な判断力を磨き上げるプロセスの重要性について、竹内先生の豊富な知見に基づいた熱意あふれるご講演をいただきました。

本研修を通じて、私たちは「教える」ことの本質を再考する貴重な機会を得ました。竹内先生が強調されたのは、教師が知識を一方向的に授けるのではなく、学生の中に深い理解を「宿す」ための舵取り役（ディスカッション・リーダー）に徹するという視点です。教室内で「勇気・礼節・寛容」の精神を共有し、心理的安全性が保たれた「学びの共同体」を築くという教えは、本学が目指す主体的な学びの場づくりにおいて極めて示唆に富むものでした。参加した教員からは、教育の原点に立ち返るような深い感銘を受けたという声が多く聞かれ、竹内先生の提唱する、学生を一人の自律した判断者として尊重する姿勢は、本学の教育理念をより具現化するための確かな指針となりました。

一方で、研修後のアンケートでは、この高度な教授法を日々の教育実践にどう結びつけていくかという、本学の次なるステップに向けた課題も明確になりました。回答した147名の教員からは、竹内先生の理論に深く共感しつつも、大規模講義や多様な専門分野においてどのように具体的に適用し、学生の議論を活性化させていくかという点について、より踏み込んだ検討を求める意見が寄せられました。また、学生たちが議論を恐れずに自分の意見を発信できるよう、初年次教育からの積み上げの重要性を再認識したという指摘もありました。本学は、今回竹内先生から受けた刺激を糧に、これらの課題を一つひとつ乗り越え、学生一人ひとりが確かな実践力を身につけられる質の高い教育環境を組織全体で追求し続けてまいります。



▲シーボルト校会場

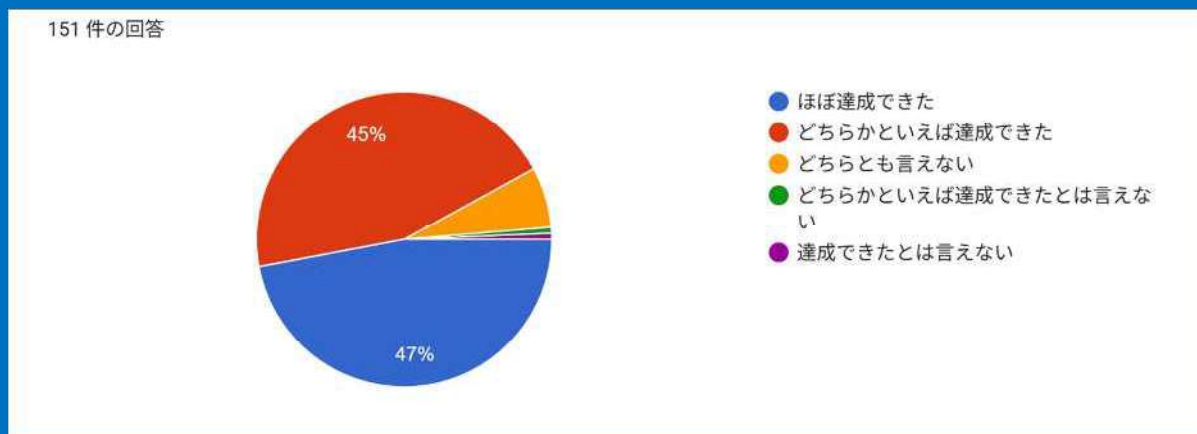
右：名古屋商科大学

ビジネススクール 教授 竹内 伸一

到達目標に対する事後評価

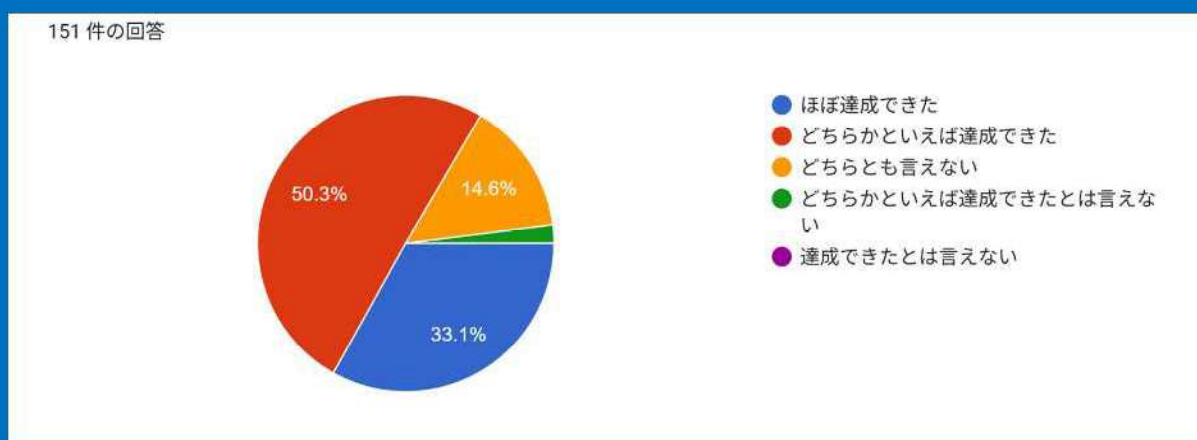
【到達目標 1】

ケース・メソッドの学問的背景から、その教授法的意義を理解する。



【到達目標 2】

本講義での学びから自身の採用する教授法を省察する。



▼シーボルト校会場



▼佐世保校会場



教養セミナー研修会

(事前研修会・振り返り研修会)

教育開発センター 副センター長 柳田多聞
国際社会学部 国際社会学科

1. 「教養セミナー」および、関連する2つの研修会について

「教養セミナー」は、本学における初年次教育の中心となる全学共通の科目である。本学は、佐世保校（佐世保市）とシーボルト校（長与町）という2つの離れたキャンパスを持ち、それぞれにさまざまな学部学科を抱えた、まさに多様性にあふれる大学である。そういった大学の新生となる1年生に向けた「高校から大学への移行の支援」と「心理的なサポート」を大きな目的とする科目が「教養セミナー」である。全15回の授業内容のうち、全ての学部学科でも共通して身に付けてほしい内容を扱う「全学共通」部分の6回分と、各学科の専門分野を反映した独自の内容を扱う9回分から構成されており、1年次の前期（第1クォーターと第2クォーター）に実施されている。

このような背景をもつ「教養セミナー」を担当する教員を支援するために、本学では、「事前研修会」と「振り返り研修会」を開催している。「事前研修会」は各年度の始めの時期（第1クォーター開始前）に、「振り返り研修会」はその年度の「教養セミナー」が終了した直後の時期（夏季休暇中）に、開催されている。

2. 本年度の教養セミナー「事前研修会」について

2025年度の「事前研修会」は、4月2日（水）17:00～18:30に開催された。佐世保校キャンパスとシーボルト校キャンパスをZoomでつないだ、90分間のオンライン会議の形式で行われた。各校の部屋には、参加者が4・5名のグループを作り、意見交換やグループワークも行われた。全体の参加者は30名であった。参加者には、今年度の「教養セミナー」担当予定の教員のほか、関心を持った教員も数名含まれていた。

初めに、橋本教育開発センター長より、研修会の趣旨を踏まえた挨拶を頂いたのち、筆者が講師を務めた。

主な内容は、「教養セミナーの趣旨と構成」「テキストの



事前研修会 シーボルト校会場



事前研修会 佐世保校会場

解説（改訂内容を含む）」「Google Classroom 内の関連資料の説明」「6 回の学部学科共通部分の授業例」「アイスブレイクの仕方」「ルーブリックの説明」などであり、その後、参加者にグループ討議をしていただいた。グループ討議では、過去に担当を経験した教員と、今年度から始めて担当する教員とが、混じるようなグループ構成にして、有意義な意見交換ができるように配慮した。

研修会の終了後、参加者に「事後アンケート」を実施した。

2.1. 「事前研修会」の「事後アンケート」について

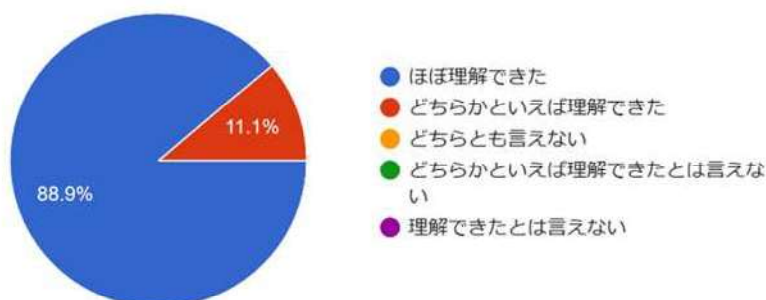
30 名の参加者中、27 名から「事後アンケート」の回答を得た。

「教養セミナーの目的の理解」「教養セミナーの進め方についての理解」「担当する上での不安や疑問の解消」について、多くの参加者に満足してもらうことができた（図1. 「教養セミナー事前研修会」事後アンケート結果抜粋）。

図1. 「教養セミナー事前研修会」事後アンケート結果（抜粋）

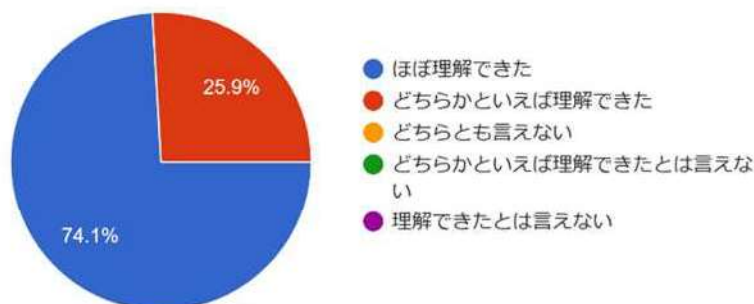
3. 本学の教養セミナーの目的について理解することが出来ましたか。

27 件の回答



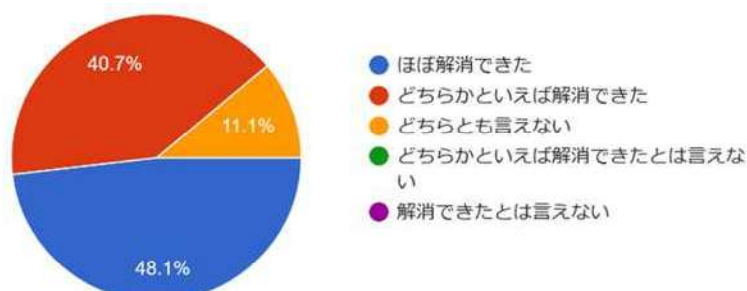
4. 教養セミナーの進め方について理解することが出来ましたか。

27 件の回答



5. 教養セミナーを担当する上での不安や疑問は解消されましたか。

27 件の回答



また、この研修会から得られた学びに関する自由記述では、「他の先生のやり方を学べた」「互いの経験やノウハウを共有できて、良い勉強になった」などの回答があり、この研修会の意義が確認された。

3. 本年度の教養セミナー「振り返り研修会」について

2025年度の「振り返り研修会」は、9月8日（月）に開催された。振り返りの研修会も、佐世保校とシーボルト校それぞれに1つの教室を設け、Zoomでつなぎ、90分間にわたって、グループワークでの意見交換と、両キャンパスを通じての情報共有をおこなった。学内に広く参加を呼び掛けたところ、教養セミナー担当教員と、関心をもつ教員併せて25名が参加した。

グループの中の人員編成は、今年度は同じ学科の担当者同士が情報共有を図れるよう、同学科を同グループに配置した。

「事前研修会」と同様に、研修会終了後に、参加者に「事後アンケート」を実施した。



振り返り研修会 佐世保校会場



振り返り研修会 シーボルト校会場

3.1. 「振り返り研修会」「事後アンケート」結果について

25名の参加者のうち、21名から回答を得た。

研修会の目的については、「ほぼ理解できた」が71.4%、「どちらかといえば理解できた」が19%と、合わせて90%を超える回答が得られた。しかしながら、「教養セミナーを担当するうえでの不安や疑問は解消されましたか」との問いに対しては、「ほぼ解消できた」「どちらかといえば解消できた」の合計は80%を越えていたが、「ほぼ解消された」は30%未満にとどまった（図2）。

また、この研修会から得られた学びに関する自由記述では、「他の先生の具体的な取り組みをお聞きすることが出来て大変参考になりました」「学科によって授業内容や考えに違いがあることがわかりました。」「先生方がそれぞれの専門性を活かしながら、学生に主体的な学びを促す工夫をされている点が印象的でした。同じ教育現場に立ちながらも、アプローチの仕方や工夫の方向性に多様性があることを実感し、自分の実践にも取り入れてみたいと感じるアイデアがいくつもありました。」「初めて担当される先生にとっては、同学科の先生と振り返りができた

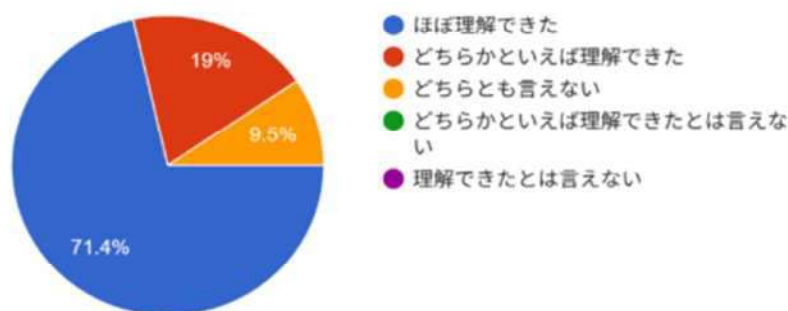
方が安心感があるようには思われますが、個人的には、他学科の先生がたと同じグループを組んでいただき取り組みを知ることでも大変参考になりました。」などの回答があった。この研修会の意義が確認されると共に、本学ならではの多様性を活かすような研修会のあり方へのヒントも得られた。

最後になるが、本学の初年次教育を支えておられる、準備・運営にあたっておられる先生方と事務局の皆さまのご尽力に深く感謝して、本稿を終える。

図2.「教養セミナー振り返り研修会」事後アンケート結果(抜粋)

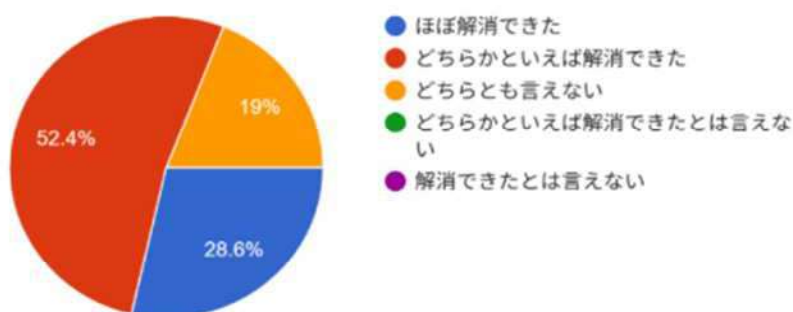
3. 本日の振り返り研修会の目的について理解することが出来ましたか。

21 件の回答



4. 教養セミナーを担当する上での不安や疑問は解消されましたか。

21 件の回答





編集後記

本年度の通信は、全 2 回の FD 研修会及び、教養セミナーの事前・振り返り研修会についてお届けしました。本通信で多くの情報が共有され、今後の FD 活動がより充実したものになることを願います。（編集担当：両校事務局）

長崎県立大学 FD 通信 第 4 号（発行日 2026 年 3 月 31 日）

※FD 通信へのご意見ご感想をお待ちしております。

教育開発センター：edu@sun.ac.jp